

## コンソ語の子音組織に関する覚書

小 脇 光 男

### 1 はじめに

2002年10月上旬から1ヶ月余りエチオピアに滞在し、(1)同国における言語政策、ならびに(2)コンソ語の語彙、音韻、形態等について基礎的な調査を行なうことができた<sup>(1)</sup>。本稿ではコンソ語調査の成果の一部、主に子音組織についてその概略を報告し、次回調査のための基礎作業とする。

### 2 コンソ民族、及びコンソ語について

コンソ民族(Xonsita)はアジス・アベバから南へ直線距離にして約500km、チャモ湖南方に居住する農耕民族である。彼らはごく最近まで周辺の諸民族、また都市文化との接触を持たず、孤立した社会生活を営んできたという<sup>(2)</sup>。宗教的には自然崇拜であるが、最近ではプロテスタントを受容しているようである<sup>(3)</sup>。

エチオピア国内にはアフロ・アジア語族(主にセム、クシ、オモ系言語)に属するおよそ百ほどの言語、ないしは方言が話されている<sup>(4)</sup>。コンソ語(afa Xonso)はクシ語派中の低地東クシ語群に属する。コンソ語の母語話者はおよそ15万人(数え方によってはこの半数)との報告がある。地域の名称に従ってBussa、Gidole、Mashile、Gato、Turo、Karateなどの方言に区分されているようであるが<sup>(5)</sup>、言語的な異同、分類基準については明らかではない。コンソ語の西側周辺に隣接するGawwada、Tsamay等の地域の言語はそれぞれ別個な言語として登録されているが、語彙的にコンソ語と互いに共通するものが多いことが報告されている<sup>(6)</sup>。ただし、それぞれの言語(ないしは方言)について包括的な語彙調査が行なわれているわけではなく、またそれぞれの母語話者数についても不明確である。コンソ語は南部地域で比較的話者人口の多い言語であり、公用語であるアムハラ語やクシ語派中最大の言語であるオロモ語(別称ガツラ語、推定話者人口は700-800万人)と並んで、南部地域における交易の場で少なからず使用されているとのことである。

序でながら、多言語国家であるエチオピアでは、それぞれの言語の平等性、少数民族の言語の保護を謳ってはいるものの、現実に自らの言語を文字化し、教育の現場で使用を試みている(あるいは試みようとしている)言語は限られた大言語のみ(例えば上述のオロモ

語)である。教育言語は一般に、中等教育から公用語であるアムハラ語が使用され、大学では英語による教育も一般的である。この点は言語政策上の問題でもあり、複雑、微妙な問題を含んでいる<sup>(7)</sup>。いずれ稿を改めて報告したい。

### 3 調査の方法等

調査の対象とする言語については、現地到着後、アジス・アベバ大学言語学科の協力を得て決定したため、コンソ語に関する具体的な知識を前もって得ることができなかった。従って、コンソ語の先行研究については、現地で得た論文数編と、帰国後に知ったいくつかの情報のみである<sup>(8)</sup>。

今回協力を得たインフォーマント(男性・29歳)はアジス・アベバ大学に在籍する大学生である。本人の申告によるとコンソの中心地域である Karate 出身で、同地域の方言を母語としているということである。過去に言語学の基礎を学んだ経験があるため、筆者の質問の意図を即座に理解してくれるという点で、短期間の調査にあっては無駄な時間を費やすことが少なく、有益であった。ただし、高等教育を受けた大学生や都市部に長期滞在している民族をインフォーマントとして採用する場合、アムハラ語による教育が普及していることもあり、母語よりも先にアムハラ語が出てくることもあるので、特に語彙の調査に際しては注意を要する。「この語はアムハラ語からの借用である」など、インフォーマントが意識的に注意を促してくれる場合はよいが、インフォーマントが無意識にアムハラ語を提示することがあるということを念頭においておく必要がある。

今回の調査では約 20 時間の聞き取りを行い、約 700 語を採取することができた。語彙の選択に当っては主に峰岸(1991)を活用した。なお、媒介言語は英語である。

### 4 音声

筆者の調査結果と比較する意味で、Getahun(1999)に示されている子音表を、表記法の一部を変更し、また IPA による発音記号を追加した上で以下に引用する。Getahun の子音表は、Black(1973)及び Sim(1977)の先行研究をほぼそのまま採用しており、両者の音韻記述はほぼ同一であるという<sup>(9)</sup>。

	<u>Labial</u>	<u>Dental</u>	<u>Alveolar</u>	<u>Velar</u>	<u>Uvular</u>	<u>Glottal</u>
Plosive	: p b	t	č [tʃ]	k	q	ʔ
Implosive	: B [ɓ]	D [ɗ]	J [ɟ]	G [g]		
Fricative	: f	s	š [ʃ]	x [x]		h
Nasal	: m	n	ñ [ɲ]			
Liquid	:	l r				
Semi-consonant	: w		y			

前記の表から窺える特徴は次の3点である。

- (a) plosive 中、labial のみに有聲 b—無聲 p の対立がある。
- (b) implosive(入破音)が四つある。
- (c) クシ諸語に特徴的な ejective(放出音)を欠く。

以下、これらの点も考慮に入れながら、筆者の調査結果を簡略にまとめる。

(1) plosive : p、t、k における有聲：無聲の対立

p、t、k の有聲音 b、d、g で始まる語は採取されていない。一方語中では、有聲音 b、d、g が認められる<sup>(10)</sup>。しかし筆者が意識的に有聲音で発音を真似ると、無聲音に訂正されることから、インフォーマントには有聲音に対する意識がないものと推測される。また、インフォーマントの発音では、同一語を複数回発音した場合、有聲：無聲の別が揺れている。条件は特定できないけれども、b、d、g は無聲音 p、t、k が有聲化したものと考え、別個の音韻ではないと仮定する。語中に複数個の plosive がある時は、そのすべてが有聲化される場合と、一部が有聲化される場合があるようである。以下はインフォーマントの発音で、有聲：無聲の別が揺れている例である。(以下の語形表記法は暫定的なものである。[ ]、/ /も省き簡略に表記する。再度の調査、分析を待つてより統一したものに改めたい。)

kerpa : kerba 胸  
apita : abita 火  
apora : abora 黒  
xopta : xobda 靴  
opita : obida 指  
harka : harga 手、腕  
yakata : yagata 首飾り  
salpata : salbada 腰紐  
ammayitta : ammayidda 朝食

なお、アムハラ語からの借用語について、アムハラ語の有聲音がコンソ語では多くの場合無聲音になっている例を参照されたい。

zeyt → sayteta<sup>(11)</sup> オリーブ油  
dabbo → tappota パン  
damoz → tamosa サラリー  
dabdabbe → taptabet 手紙  
anabbaba → anappapiya 書く

(2) plosive : č [tʃ]

č [tʃ]は語頭、語中においても出現率の極度に低い子音である。語中では前項の p、t、k と同様に有聲化音(j)も認められる。

čera 泥棒  
čen 五  
panča : panja 非常に

(3) glottal : ʔ

ʔ は母音間に認められる。

koʔa 谷  
aʔulsa 重い  
aʔilaʔa 緑  
kalaʔata 蜘蛛  
maʔaša ワニ

(4) uvular : q

q はアラビア語起源の外来語にのみ稀に認められるが、インフォーマントの発音ではむしろ後述の放出音 k' として実現されるようである<sup>(12)</sup>。q はインフォーマントの個人的な癖であって、音韻的には意味を持たないものと理解する。

k'alameta / qalameta 色、ペン  
suk'eta / suqeta 店

(5) fricative : f, s, š [ʃ], x [x], h

fricative の系列については特に問題はないであろう。語頭、語中のいずれにも現れ、また有声化する例は認められない。

(6) implosive (入破音)

前記 Getahun の子音表では、B [b]、D [d], J [ʃ]、G [g] の四つが入破音が認められている。しかし、今回の筆者の調査によれば、少なくとも筆者のインフォーマントの母語では、入破音は D [d] のみが存在する。

dikla 腕  
diklada 腕の複数形  
fadita 結婚

(7) ejective (放出音)

Getahun の子音表には放出音が欠けている。しかし、今回の筆者の調査によれば、少なくとも č [tʃ] と k にはそれぞれ対立する放出音 c', k' が認められる。共にその出現位置にかかわらず、時に有声化音が認められる。特に k' は、筆者の耳には g の摩擦音 [ɣ] に近く聞こえることがある。

c'ifeda 指輪 (有声化した j'ifeda も聞かれる。)  
morkuc'a 魚  
k'onk'eta 喉  
šlolok'ita 爪

なお、他のクシ諸語の例から、p の放出音 p' も期待されるが、コンソ語には存在しないようである<sup>(13)</sup>。

(8) nasal : ñ [ɲ]

出現頻度が極めて低く、母音 i の前にのみ現れるようである。独立の音素とすべきか、n の異音と見なすべきか検討を要する。

ñirfa 毛  
añiya 歩く

(9) その他

重子音は単音に対して音韻的に有意味と考えられる。

tika 家 : tikka 家の複数形  
orana 槍 : oranna 槍の複数形

同様に母音についても、その音量が音韻的に有意味と認められる対が認められる<sup>(14)</sup>。

fula 戸 : fūla 顔  
harka 手 : harkā 手の複数形

## 5 子音組織—まとめ

以上の調査結果をもとに、作業の第一段階として子音音素を仮に指定すると以下のようになる。

	<u>Labial</u>	<u>Dental</u>	<u>Alveolar</u>	<u>Velar</u>	<u>Uvular</u>	<u>Glottal</u>
Plosive	: p	t	č [tʃ]	k		ʔ
Implosive	:	ɗ				
Ejective	:		č'	k'		
Fricative	: f	s	š [ʃ]	x [x]		h
Nasal	: m	n	ñ [ɲ] (?)			
Liquid	:	l r				
Semi-consonant	: w		y [j]			

なお、上記の子音組織は前掲の Getahun のものと異なっている。しかし、これは同氏の拠り所とした著者たちの調査結果を否定するものではない。同じ「コンソ語」を調査対象としているものの、インフォーマントの方言、発音上の微妙な癖などにより、そのような結果が得られたとしても不思議ではないからである。

## おわりに

本稿ではコンソ語の調査結果に基き、その子音組織の構築を試みた。これは冒頭にも述

べたように、次回調査に向けての基礎的な作業であり、不明な点もいくつか残されている。特に、今回触れることができなかったが、アクセントの記述が全く未解明のままである。これらは次回の調査によって補足、修正したい。

今後の課題としては、更に形態、統語の面に進み、コンソ語の概観を記述し、また、これと並行して、今回ほとんど利用することのできなかつたいくつかの先行研究に目を向ける必要がある。

## 注

- (1) 本調査・研究は平成14年度科学研究費補助金(基盤研究B)「多言語国家エチオピアにおける少数言語の記述、ならびに言語接触に関する調査研究」(代表者:金沢大学文学部、柘植洋一)に基づくものである。
- (2) 筆者は今回、現地を訪れる機会がなかった。コンソ社会の概要については篠原(2002)などを参照。
- (3) 新約聖書の一部がコンソ語に翻訳されているとの報告があるが、未見である。
- (4) クシ語派、オロモ語等については亀井孝他編『言語学大辞典』(三省堂)の当該箇所を参照。ただし、「コンソ語」の項目はない。また、Asher(2000)も参照。
- (5) Wedikind(2002)、Asher(2000)などを参照。Aher(p.241)では、これらの方言群を一括して「コンソ・ギドレ語」と呼び(いわゆる「コンソ語」とはKarate方言を指しているようである)、北のギドレと南のコンソでは互いに理解不能であろうとしている。
- (6) <http://www.ethnologue.com> による。
- (7) エチオピアの言語政策を扱った最近のものとして Cohen,G.P.E.(2002): Some considerations regarding the use of local languages in the primary education system of the SNNPR, Ethiopia. *Proceedings of the 13<sup>th</sup> Annual Conference of the Institute of Language Studies* (Institute of Language Studies, Addis Ababa University)
- (8) 例えば、シカゴ大学オリエント学研究所のホーム・ページにアフロ・アジア諸語の比較語彙集が公開されており、その中にコンソ語の語彙集(約450語)も含まれている。  
<http://mithra-orinst.uchicago.edu/~gragg/aai/ecush/kon.html> を参照。  
また、Unseth(1990)には、コンソ及びコンソ語に関する論文が10編余り記されているが、ほとんど未見である。
- (9) これら二つの論文について筆者は未見であるため、どの方言を記述したものかなど、詳細は分からない。なお、偶然ではあるが、Getahunは筆者と同じインフォーマントから情報を得ているので、その論文中に挙げられている語形表記は一応の参考になる。
- (10) 上記注(8)挙げたシカゴ大学の語彙表には、gで始まる語が若干記されているが、b、dに始まる語は皆無である。同語彙表中に記されている語は、細かな記述の違いを除けば、筆者の採取した語と一致するものが少なくない。ただし、kerpa:kessa「胸」、tika:mana

- 「家」、tappa:lamala「七」(左側が筆者の採取した語形)のように、全く語形が異なっているものも含まれている。
- (11) アムハラ語形をそのまま使う場合は有声のまま zeyt (< アムハラ語形 zayt)と発音されるようである。
- (12) 下記の例語はアムハラ語を通して借用されたものであろう。これらの語に現れる q はアムハラ語では放出音 k'である。
- (13) 典型的に放出音 p'は稀だという。亀井孝他編『言語学大辞典 6 巻一術語編』(三省堂) p.1303 参照。
- (14) 母音について全く触れる機会がなかったが、母音組織は a、e、i、o、u の五母音としては間違いない。ただ、恐らく弱化したと思われるəが時に認められる。

### 参考文献

- Bender, M. L., J. D. Bowen, R. L. Cooper, C. A. Ferguson (1976): *Language in Ethiopia* (Oxford University Press)
- Black, Paul (1973): Draft Sketch of Konso Phonology, Morphology and Syntax. *Language Misc.* 3
- Getahun Amare (1999): Noun Phrase Structure in Konso. *JES* Vol.32/1
- Heine, Bernd and Derek Nurse ed. (2000): *African Languages: An Introduction* (Cambridge University Press)
- Sim, R. J. (1977): *A Linguistic Sketch: Phonology and Morphology of the Word in Konso*. M.A. thesis, University of Nairobi.
- Wedikind, Klaus ed. (2002): Sociolinguistic Survey Report of the Languages of the Gawwada (Dullay), Diraasha (Gidole), Muusiye (Bussa) Area. (SIL International)
- Unseth, Peter (1990): *Linguistic bibliography of the non-Semitic languages of Ethiopia*. Ethiopian Series Monograph, 20. East Lansing and Addis Ababa: African Studies Center, Michigan State University and Institute of Ethiopian Studies, Addis Ababa University.
- アジア・アフリカ諸言語の比較・対照プロジェクト (1990): 「アジア・アフリカ諸語のための文法調査表 A Grammatical Questionnaire for Asian and African Languages」『アジア・アフリカ文法研究』19 (AA 研)
- Asher, R.E., Christopher Moseley 編 [日本語版監修: 土田滋、福井勝義] (2000): 『世界民族言語地図』(東洋書林)
- 篠原 徹 (2002): 「エチオピア・コンソ社会における農耕の集約性」『アフリカ農耕民の世界—その存来性と変容』講座・生態人類学 3 (京都大学学術出版会)
- 峰岸真琴 (1991): 「語彙調査表の再構成について」『辞書編纂—辞書編纂プロジェクト叢刊—』
- 湯川恭敏 (1979): 「バントウ諸語語彙調査標試案」『アジア・アフリカ言語文化研究』17 (AA 研)